様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　２３年　４月　１５日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５２００７８

研究課題名（和文）　ペラギウス派神学の起源とオリゲネス主義からの影響に関する文献学的・思想史的研究

研究課題名（英文）　Philological and Ideological Study on Origin of Pelagian Theology and Influence from Origenism

研究代表者
山田　望（YAMADA NOZOMU）
南山大学総合政策学部・教授
研究者番号：７０２７９９６７

研究分野：人文学、西洋思想史、西洋史、キリスト教教理史
科研費の分科・細目：哲学、思想史（２８０５）
キーワード：古代キリスト教思想

１．研究計画の概要

本研究の目的は、アウグスティヌスとの論争に敗れ、西方教会最大の異端と見なされるに至ったペラギウス派神学の思想史的起源は、４世紀のオリゲネス主義神学の中でも特にエヴァグリオスやルフィーヌスに代表される一連のオリゲネス主義にあるのではないかとの仮説テーゼを立て、これを可能な限り検証しようというものである。

以上の研究目的遂行のためには、まず、エヴァグリオス、ルフィーヌス、ペラギウスとその弟子たちに関する、思想史的関連の前提となる歴史的事実関係を確認、確定しておく必要がある。その上で、ペラギウス派は、ルフィーヌスやエヴァグリオスの思想をどの文献からどのように継承したと考えられるのか、文献学的、思想史的関連を検証する必要がある。こうした検証を積み重ねることによって、最終的には、ペラギウス派の思想史的起源は、彼ら独自の異端的見解そのものにあったというよりはむしろ、既に存在していたアクイレイアのルフィーヌスやエヴァグリオスをはじめとするオリゲネス主義者の思想であったとの仮説テーゼを検証したい。仮に、もしもこのテーゼ自体に問題があり、ペラギウス派の思想史的起源について他の可能性が出てくるならば、仮説テーゼを誤りであったと結論づけることも可能であり、もしくは大きく修正する形で新たなテーゼを導きだすことも可能であろう。

２．研究の進捗状況

「研究計画の概要」で述べた目的遂行のための手順のうち、まず、思想史的関連の前提となる歴史的事実関係を確認、確定しておくという点については、ほぼ果たすべき作業と予測される検証結果が得られたと言える。すなわち、アクイレイアのルフィーヌスを中心としたエヴァグリオスらオリゲネス主義者やペラギウス派との歴史的関連が人脈の点でこれまでよりも一層明確なものとなったことは明らかである。

ところが、当初予測された、オリゲネス主義の中でもエヴァグリオスの修道倫理の内容と、ペラギウス派のそれとの文献学的依存関係という点で、エヴァグリオスの著作のあるものについては、ルフィーヌスの翻訳であることは間違いないが、それ以外のラテン語訳が果たしてルフィーヌスの翻訳によるものであるのか否か、という点で、これまでのところ結論が出ないままとなっている。また、エヴァグリオスの修道倫理とペラギウス派のそれとの間に、ある種の類似性や共通性は十分に認められるものの、特に魂の起源や人間本性に関する理解について、エヴァグリオスは霊魂伝移説の立場を取り、一方、ペラギウス派は霊魂創造説の立場を取っているという点に大きな違いがあるという点が明らかとなってきた。したがって、エヴァグリオスとペラギウス派との関連は、アクイレイアのルフィーヌスを媒介にしながら、霊魂の有り様を巡る点では見解を異にしながらも、修道倫理、特にアパセイア（不受動心）の理念と実践に関する間接的な影響関係に留まるのではないかとの見方が濃厚となってきた。この点で、ヴァチカンのアウグスティニアーヌム研究所のスタッフから得られた助言や知見が多いに助けとなった。

エヴァグリオスとの関連については、当初予測されたテーゼを若干修正せざるを得なくなったが、むしろ、それは研究遂行の否定的側面というよりは、かえって力点をアクイ

レイアのルフィーヌスの方へ求めるという研究方向の修正として肯定的な機能を果たす結果となった。そして、エヴァグリオスとペラギウス派との関連も、直接的な影響関係というよりも、ルフィーヌスを媒介とした関連であること、さらに、ルフィーヌスとペラギウス派との関連こそが、むしろきわめて重要であることを示唆する結果をもたらした。

さらに、アクイレイアのルフィーヌスのいわば先輩格にあたるアクイレイアのクロマティウスとペラギウス派との関連も新たに明らかとなった。とりわけ、ペラギウス派文書に特徴的な、「キリストの模範」や「模範」と「模倣」という一連の概念群がペラギウス派に先立つアクイレイアのクロマティウスの諸文書の中でも繰り返し用いられていたことは、ペラギウス派が、このクロマティウスからも多大な影響を与えられていた可能性を十分に示唆するものと言える。すなわち、本研究の思想史的、文献学的研究の結果、エヴァグリオスとの直接的影響関係については多少の限定と修正を加えなければならないが、しかし、他方では、エヴァグリオスの修道倫理を媒介していたアクイレイアのルフィーヌスの文書群やクロマティウスの著書とペラギウス派文書との依存関係が新たにクローズアップされるという成果が明るみに出てきたと言える。つまり、ペラギウス派の思想史的起源は、これらアクイレイア出身の司祭たちによって媒介された東方的修道倫理であった可能性が濃厚となった。

３．現在までの達成度

＜区分＞③やや遅れている

研究の進捗状況において述べたように、当初予測された仮説テーゼに対して、その内容を一部修正せざるを得なくなったが、しかし、他方、アクイレイアのルフィーヌスならびにアクイレイアのクロマティウスら、アクイレイアを拠点とする教会指導者たちとペラギウス派との関連が大きく浮かび上がってきたと言える。エヴァグリオスら、オリゲネス主義とペラギウス派との関係も、これらアクイレイアの教会指導者たちを仲立ちとした影響関係である可能性が強まった。この新たに得られた研究方向へと軌道修正し、とりわけ、ペラギウス派全般、特にペラギウスの弟子であったユリアヌスらの修道倫理とルフィーヌスを媒介とする一連の東方思想との関連の検証を急がなければならない。

アクイレイアの思想家たちを、ペラギウス派の有力な思想史的起源として設定し直し、それに従って、仮説テーゼの見直しを計る必要が生じてきたことが、研究の達成度を若干遅れたものと見なさざるを得なくなった理由である。しかし、これはあくまでも研究の方向性の軌道修正に伴う遅れであり、これにより修正されたテーゼが十分に証明されるならば、最終的には、研究の目的は十分に達成されることになるであろう。

４．今後の研究の推進方策

「現在までの達成度」において指摘したように、アクイレイアのルフィーヌスならびにアクイレイアのクロマティウスを中心とした東方起源の修道倫理こそが、ペラギウス派の思想的起源ではないか、との修正されたテーゼを十分に検証すべく、これらアクイレイアの思想家たちの文書と、さらにペラギウスの弟子であったユリアヌスを初めとするペラギウス派文書との思想史的関連を検証して行くことが、今後の主要な研究推進方策となる。その方向を推進しつつ、さらに、当初の仮説テーゼで前面に押し出されていたエヴァグリオスの修道倫理との関連も、再度、どのような経路でそれがペラギウス派へと伝わったのかが新たに解明されるであろう。

５．　代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計４件）

山田　望「世俗化した教会の制度化と権威主義化に抗して−ペラギウス派修道倫理の影響力と挫折−」『キリスト教史学』, 査読有り, 第65 集, 2011 年, 掲載決定済み。

山田　望「西方教会の『構造』転換−ペラギウス派の思想史的起源を手がかりに」,『宣教学ジャーナル』, 査読有り, 第５号, 2011 年, 掲載決定済み。

山田　望「ペラギウスとアウグスティヌスにおける洗礼・聖霊理解の相違を巡って−三本論文（『キリスト教史学』第６２集所収）の拙著言及への応答として」,『キリスト教史学』, 査読有り, 第６４集, 2010 年, pp. 172−196.

山田　望「エヴァグリオス修道神学の西方伝播に関する歴史的検証−ルフィーヌスおよびペラギウス派の人脈を中心に−」,『アカデミア』人文・社会科学編, 査読無し, 第８７号, 2008 年, pp. 155−187.

〔学会発表〕（計３件）

山田　望「世俗化した教会の制度化と権威主義化に抗して−ペラギウス派修道倫理の影響力と挫折−」キリスト教史学会, 2010 年 9 月 10 日, 宮城学院大学。

山田　望「西方教会の『構造』転換−ペラギウス派の思想史的起源を手がかりに」, 日本宣教学会, 2010 年, 6 月 26 日, 清泉女子大学。

山田　望「ペラギウスとアウグスティヌスにおける洗礼・聖霊理解の相違を巡って−三本論文（『キリスト教史学』第６２集所収）の拙著言及への応答として」, キリスト教史学会, 2010 年, 11 月 21 日, 国際基督教学会。